

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520504

研究課題名(和文) 名詞の関係性を中心とする文法と意味の記述研究

研究課題名(英文) A descriptive study of the relativity of the noun in Japanese: Its grammar and meaning

研究代表者

丹羽 哲也 (NIWA, Tetsuya)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：20228266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本語の文法研究の中で、名詞の研究は最も遅れている領域である。本研究は、名詞の中でも抽象的な意味を持つ名詞に焦点を当て、その意味的・文法的性格を解明することを目的としている。具体的には、「連体節＋主名詞」(「事件が起きた背景」)、「名詞＋の＋主名詞」(「事故の原因」、「彼女の性格」)、「存在文・所在文」(「この曲には独創性がある」・「人は死ぬ運命にある」)、「コピュラ文」(「将来の懸念はインフレだ」)などについて、各構文の下位分類と、構文間の相互関係、名詞の意味類型との関係を考察し、将来の抽象名詞辞書構築のための基礎とした。

研究成果の概要(英文)：The noun is the most understudied aspect of Japanese grammar. We focus on abstract nouns and aim to shed light on their semantic and grammatical characters, especially the “adnominal clause-head noun” structure (jiken- ga okita haikai (“the background where the event occurred”)), the “noun-adnominal particle no -head noun” structure (jiko- no gen-in (“the cause of the accident”)/ kanojo- no seikaku (“her character”)), the existence and location construction (kono kyoku-niwa dokusousei-ga aru. (“There is originality in this music.”)/hito-wa sinu unmei-ni aru. (“A human being is destined to die.”)), and the copular construction (shourai-no kenen-wa infure-da. (“Our future anxiety is inflation.”)). We investigated the sub-classification of each structure/construction, the relations between them, and the relations between the semantic class and their structures/constructions. Our analysis laid the groundwork for compiling an abstract nominal lexicon.

研究分野：日本語文法

キーワード：日本語文法 名詞

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語の文法研究の領域において、名詞の研究は最も遅れている。コンピュータ文や連体修飾構造のような文法構造の研究は多いが、名詞の語彙的意味と名詞の用いられる構文・構造とを体系的に関係づけたものはごく乏しい。

体系だった研究の数少ない例として、情報処理振興事業協会『計算機用日本語基本名詞辞書 I P A L (Basic Nouns)』(1996)がある。この辞書は、名詞ごとに、意味情報(意味素性)と統語情報が例文とともに示されている。例えば「基盤」という名詞は次のように記載されている(抜粋、表記法も変更)。

「きばん(基盤)」
意味記述: 物事の成立を支える根底となる部分。
意味素性 1: KND 用例 1: 着実な努力が成功の基盤となる。
意味素性 2: ABS 用例 2: 民主主義の基盤を揺さぶるような事件が起こった。
(注) KND (kind)、ABS (abstract)
項の用法 1: -ガ、-ヲ、基盤{二/ト}する。
-ガ、基盤{二/ト}となる。
-ガ、-ヲ、基盤二{置く・据える}。
-ガ、-ヲ、(産業発展の/...)基盤トみなす。
項の用法 2:
連体用法: NP ノ: 基盤のもろさ、-の弱さ、-の広さ、-の強化、-の整備.....
連体被修飾用法 1
ノ NP: 関係事象 生活の基盤、経営の-、産業振興の-、農業の-
対象 会社の基盤、学校の-、国の-、都市の-
.....
連体被修飾用法 2
S 文例: [このような問題が話し合える]基盤が当時の日本にはなかった。.....
(「述語用法」「形態情報」は省略。)

この辞書では、このように「項の用法、連体用法、連体被修飾用法、述語用法」といった文法情報が、名詞ごとに逐一記載されている。しかし、意味記述や意味素性の記載と文法情報がどのように関係するのか、このままではよくわからない。ここに名詞研究の困難がある。

(2) 名詞研究の遅れは、名詞の分類という面にも現れる。名詞は「普通名詞、固有名詞、代名詞、数詞」のように分類されるが、名詞の大部分を占める普通名詞の下位分類となると、広く知られるものはない。他の品詞を見ると、動詞は、ヴォイスに関して自動詞・他動詞、能動詞・所動詞といった分類が、アスペクトに関して状態動詞・動作動詞(主体動作動詞・主体変化動詞.....)などといった分類があり、形容詞には状態形容詞と感情形容詞という分類、副詞には様態副詞・程度副詞・陳述副詞という分類が知られている。これらの分類に対して様々な検討が加えられ改定が提案されるとしても、その基盤となる説が広く共有されている。ところが、名詞に

ついては、その多様さと膨大さから、文法的な特徴を簡単に取りだすことはできず、それ故に、分類の枠組みもできていない。

2. 研究の目的

本研究は、名詞の中でも、関係名詞・抽象名詞に着目し、名詞自体が持つ関係性が、文の中でどのように働くか、言い換えれば、名詞の意味が文構造にどのように反映するかという問題を解明することを目的とする。将来的には、抽象名詞辞書といったものの構築をめざすが、これはその基礎作業となるものである。

3. 研究の方法

名詞は極めて膨大にあり、用いられ方も多様であるが、その中で、名詞の意味が反映しやすい構文・構造に焦点を当てる。具体的には、名詞述語文、存在文・所在文、連体修飾節構造、「名詞+の」による連体修飾構造について、その構文・構造の持つ意味と、そこに用いられる名詞の意味との相互関係を考察していく。

申請者は、平成 20 年度～23 年度に交付を受けた、基盤研究(C)研究課題「視点と基準点の諸問題」の中で、連体修飾節構造と「名詞+の」による連体修飾構造の研究をある程度進めることができた。これらの研究成果を拠り所として、上記の構文・構造について、数百の名詞の意味類型との関係を探る。

データは、新聞のコーパスや現代日本語書き言葉均衡コーパスから得られたものが主である。

4. 研究成果

(1) 上記の前年度までの研究と本研究にまたがるものとして、連体節構造のいわゆる「外の関係」について、その下位タイプによってどのような名詞が用いられるかを考察した。

大きくは、「相対補充のみを取る名詞」、「内容補充のみを取る名詞」、「相対補充と内容補充の両方を取る名詞」という分類と、「位置関係」、「量的関係」、「随伴関係」という分類があり、両者は次のような関係にある。

	相対補充のみを取る名詞
位置関係: 場所 時間	上、後ろ、前、横、 後、次、前、翌朝
量的関係: 部分 積	余り、一部、大半、半分 倍

	内容補充のみを取る名詞
発話・思考	疑い、噂、解釈、決心、 諺、不平、見方
事柄	過去、癖、傾向、作用、 事故、習慣、点、歴史

この中の「随伴関係」については、<原因、寄与、結果、応対、側面、範列>という下位類に分け、また、「相対補充と内容補充の両方を取る名詞」を、両者が独立して現れるタ

イブと両者が重なり合って現れるタイプとに分け、それらの関係を次のような形にまとめることができた。

随伴関係	相対補充と内容補充の両方を取る名詞	
	独立型	重なり型
原因	証し、いきさつ、原因、証拠、兆候、動機、由来、要因、理由、[鍵、きっかけ、契機、条件、秘密]	性格、性質、《几帳面さ、宿命、親切さ、ずぶとさ、誠実さ、狭さ、無神経、無知》 [才能、力、能力]
寄与	工夫、工作、策、支度、手段、準備、手がかり、手筈、秘訣、方法、用心、妨げ、邪魔	依頼、打ち合わせ、覚悟、気力、交渉、心構え、自由、信念、相談、手間、度胸、努力、配慮、約束、勇気
結果	印象、恩恵、感じ、感想、形跡、結果、たたり、つけ、名残、罰、果て、利点	安心感、思い、恩義、感触、疲れ、動揺、『ありがたさ、悲しみ、恐怖、苦しみ、寂しさ、ショック、不安』
応対	お祝い、お返し、恩返し、記念、答え、償い、報酬	知らせ、保証、真似
側面	意味、確率、距離、経緯、数字、速度、程度、手つき、中身、頻度、要点	有様、気配、姿、風景、様子、『異様さ、公平さ、贅沢、不幸、不思議、不便さ、無理』
範列	裏、代わり、背景、背後、半面	

* 相対補充のみを取る名詞にも、随伴関係を表すものがあるが、ここでは省略。

* [] は原因と寄与にまたがる名詞

『 』 は側面と結果にまたがる名詞

《 》 は原因と側面にまたがる名詞

* 独立型は、相対補充「実際に会った印象」（これは「結果」の例）と内容補充「メリハリに欠ける印象」とが独立して存在するタイプ、重なり型は「野球ができるありがたさ」のように、相対補充（これは結果の例）にも内容補充にも解釈でき、切り離せないタイプである（独立型と重なり型にまたがる名詞もあるが、表では省略）。

個々の名詞の意味の複雑さを反映して、分類も、このように複雑になる。

（以上、[雑誌論文]）

(2) 存在表現を、「BにAがある」という存在文と「AはBにある」という所在文に分け、それぞれを、Bにどのような名詞が用いられるか、また、AはBとどのような関係にあるかという観点から下位分類し、両構文の対応関係を考察した。その結果、概略次のような関係にあるという結論を得た。

存在文	所在文
場所型(BにAがある) 机の上に時計がある。	場所型(AはBにある) 時計は机の上にある。
時間型(BにAがある) 3時に会議がある。	時間型(AはBにある) 会議は3時にある。
周辺要素型 ×	周辺要素型(AはBある) 着物はたくさんある。
無表示型(Aがある) 京という単位がある。	無表示型 ×
抽象場所型(BにAがある) 現実の中に希望がある。	抽象場所型(AはBにある) 希望は現実の中にある。
上位型(BにAがある) 春の行事には遠足がある。	上位型(AはBとしてある) 遠足は春の行事としてある。
上位型(BにAがある) 頭痛の原因にはストレスがある。	内容型(BはAにある) 頭痛の原因はストレスにある。
関係基体型(BにAがある) 人間には死ぬという運命がある。	状況型(BはAにある) 人間は死ぬ運命にある。
関係基体型(BにAがある) この曲には独創性がある。	関係基体型(AはBにある) 独創性はこの曲にある。

* 上半分は、Bが場所か、時間か、周辺要素（副詞など）か、抽象場所か、無表示かという分類、下半分は、BがAの上位項（上位型）関係名詞Aを関係の基体となるBが補充（関係基体型）関係名詞Aを下位項Bが補充（内容型所在文）、AがBの状況（状況型所在文）というように分けられる。内容型と状況型は所在文のみで、そのまま対応する存在文がない。

* 波縦線は、存在文と所在文が焦点位置を入れ換えた関係にあるもの。

* 二重縦線は、存在文と所在文が二格とガ格を入れ換えた関係にあるもの。

存在文と所在文は別の構文として扱わなければならない、両者の対応関係は上の表のように複雑である。

存在表現の先行研究は、「ある」と「いる」の使い分けに関するものが中心であったが、上記のように、抽象的な名詞を用いられる場合には、種々のタイプが存在することが明らかになった。（以上、[雑誌論文]）

(3) 上記の存在文・所在文とコピュラ文（AはBだ、BはAだ）との対応関係を考察し、概略、次の表のようにまとめることができた。コピュラ文は「AはBだ」は、帰属文（AがカテゴリーBに属する）指定文（カテゴリーAの要素はBだ）、性質文（Aが性質Bを持つ）、一時的状態文（Aが状態

Bにある)に加えて、慣用的ウナギ文(ウナギ文で、特別な文脈を必要としないもの)が対応関係に重要な役割を果たしている。

コピュラ文	存在文・所在文
慣用的ウナギ文 隣はコンビニだ。 コンビニは隣だ。	場所型存在文・所在文 隣にコンビニがある。 コンビニは隣にある。
3日は入学式だ。 入学式は3日だ。	時間型存在文・所在文 3日には入学式がある。 入学式は3日にある。
お饅頭は100個だ。	周辺要素型所在文 お饅頭は100個ある。
性質文 私の家は近くだ。	場所型所在文 私の家は近くにある。
実態は闇の中だ。 紛争の背景は貧困だ。	抽象場所型存在文・所在文 実態は闇の中にある。 紛争の背景には貧困がある。
彼は問題だ。	関係基体型 彼には問題がある。
一時的状態文 人口は減少傾向だ。	状況型所在文 人口は減少傾向にある。
指定文 将来の懸念はインフレだ。	内容型所在文 将来の懸念はインフレにある。
帰属文 インフレは将来の懸念だ。	上位型所在文 インフレは将来の懸念としてある。

(以上、[雑誌論文])

(4)連体修飾節構造の外の関係における基本形とタ形の対立を、内の関係と比較して検討した。例えば、

a 結婚するお祝いに食器を贈った。

b 結婚したお祝いに食器を贈った。

を比べると、時間的な順序が、aは「贈った結婚する」、bは「結婚した贈った」のように基本形とタ形とで順序が逆になる。一方、

c 作品を褒めたたえる手紙を書いた。

d 作品を褒めたたえた手紙を書いた。

という例の場合は、「褒めたたえる/た」と「書いた」のは同時であり、基本形とタ形が同じ事態を表している。a bとc dの違いは「お祝い」と「手紙」という主名詞の違いに依っており、外の関係においては、主名詞の役割が大きい。但し、主名詞の性格、基本形・タ形の性格、主節述語の性格の三者の相互関係によって決まるので、単純な形で一般化はできない。(以上、[雑誌論文])

(5)連体修飾節について、先行研究を再検討し、

「連体節+主名詞」構造と「名詞+の+主名詞」構造を統合して類型化した。

連体修飾の種類	連体節の場合の通称	主名詞における修飾要素の必須性
事物に対する属性・状況の付与 壁が白い家 白い壁の家	内の関係	ごく少数が必須
上位項に対する下位項の補充 会費を値上げする案 会費値上げの案	外の関係 内容補充	ごく少数が必須
関係概念に対する事物の補充 事故が起きた原因 事故の原因 太郎の姉	外の関係 相対補充	必須

* は、連体節構造と「名詞+の」構造との対応がわかりやすい一例を挙げたままで、個々には、の例のように対応しないものも種々ある。

(以上、「連体修飾」『言語研究の革新と継承 文法』所収、刊行時期未定)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

丹羽哲也、存在文・所在文とコピュラ文の対応、文学史研究、査読有、56号、2016、184-196

丹羽哲也、存在文の分類をめぐって、国語国文、査読有、84巻4号、2015、260-280

丹羽哲也、所在文の広がり 存在文との対応、文学史研究、査読有、55、2015、1-16、<http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/>

/i14/meta_pub/G0000007repository_111E0000001-55-1

丹羽哲也、連体修飾節における基本形とタ形の対立、形式語研究論集、査読無、2013、263-283

丹羽哲也、連体修飾節構造における相対補充と内容補充の関係、日本語文法、査読有、12巻2号、2012、78-94

[学会発表](計3件)

丹羽哲也、「うへ(上)」「した、もと(下)」の形式化、形式語研究会、2014年9月21日、国立国語研究所(東京都立川市)

丹羽哲也、所在文のタイプ 存在文との対応から、形式語研究会、2013年12月7日、龍谷大学(京都府京都市)

丹羽哲也、連体修飾節・外の関係における基準時、形式語研究会、2012年9月30日、国立国語研究所(東京都立川市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

丹羽 哲也(NIWA, Tetsuya)

大阪市立大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号: 20228266